様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １８ 日現在

機関番号：８２６２０
研究種目：若手研究
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ１２８２３

研究課題名（和文）南西諸島における風葬の定着過程に関する研究

研究課題名（英文）Study of the spread of aerial burials in Ryukyu Islands

研究代表者
牛窪　彩絢（Sugimoto, Saaya）

独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所・文化遺産国際協力センター・アソシエイトフェロー

研究者番号：４０８４７１１７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、宗教学的手法で風葬が琉球諸島に定着する社会基盤等を考察することを目指した。
研究の過程で、近世琉球王朝にて風葬と区別される「殯」の期間が設けられていたことが分かり、「殯」の実態や成立起源の検討を行った。その結果、「殯」／風葬の広まる社会基盤として、儒教などの成立宗教の影響は希薄であったことが分かった。また、成立起源を歴史学的に説明することが困難なことが分かり、死生観からの構造分析を試み、世界観研究にも踏み込むことができた。
一方、葬墓制変容をもたらすものは死生観よりも、火葬化、産業化、墓地行政等の為す役割が甚大であることもわかった。今後は、近代化政策等からの社会学的分析が肝要となる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
研究過程で近世琉球王朝の「殯」の期間を発見し、これまで風葬や日本古代のモガリと混同されてきた研究状況を指摘しつつ、基礎的研究データを示せた学術的意義は大きかったと言える。また、歴史学的・機能的分析だけでなく、死生観からの構造的分析を交えた論文を発表できたことは、琉球葬墓制研究に学際的視点を投げかけたという点で有意義であったと思われる。
また本研究は、急速に風化する風葬文化を後世に残すため、記録保存を行うという目的も有していた。そのため、関係者より記録映像を入手するとともに参与観察・インタビューを通して一次資料を得たため、公開方法について課題はあるものの、社会的意義も果たすことができたと考える。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to examine the social basis for the establishment of wind burial in the Ryukyu Islands.
In the course of this research, it was discovered that a period of hin, which was distinguished from wind burial, was established in the early modern Ryukyu Dynasty, and the situation of hin and its origins were examined. As a result, it was found that the influence of established religions such as Confucianism was not so strong as the social basis for the spread of hin and wind burial. I also found it difficult to explain the origins of hin from a historical perspective, so I attempted a structural analysis from the view of life and death, and were able to enter into research on worldviews.
On the other hand, it was also found that the role of cremation, industrialization, cemetery administration was more significant than the view of life and death in bringing about the change in the funerary system. Sociological analysis of modernization policies will be essential.

研究分野：宗教学

キーワード：葬墓制変容　殯　琉球　風葬　洗骨　墓地埋葬法　墓地行政

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

南西諸島には、戦後に火葬が定着するまで広く風葬の習慣があったことが知られている。風葬を含む同地域の葬墓制研究は、1920 年代に民俗学分野で開花して以降、近年では考古学や歴史学が中心となり、各分野において豊富な研究が蓄積されてきた。しかし、基軸となってきた民俗学内部で見ると、琉球葬墓制研究は決して主流をなすものではなく、学術的探究の余地が大いに残されている。また、多様な葬制が近世になぜ風葬に収斂するか等、歴史的にも未解明な点は多い。

２．研究の目的

本研究は、土葬から風葬への変化が明確な八重山列島に注目し、考古学や文献史学とは異なる宗教学的アプローチを用いて風葬が諸島に定着する社会基盤や歴史を考察することを目指した。また、今や急速に失われつつある風葬文化を後世に残すため、伝承の記録保存を行うことも目的とした。

３．研究の方法

主に 2 つの研究方法をとった。1 つ目は文献学的方法であり、2 つ目がフィールドワークによる文化人類学的方法である。前者によって、南西諸島の風葬の歴史の解明を、後者によって風葬が定着する社会基盤や背景にある死生観の解明を行うことを試みた。前者の方法をとった際には、民俗学・文化人類学分野の文献資料だけでなく、近年研究蓄積が豊富な考古学・歴史学における報告資料や先行研究、一次資料も積極的に用いた。フィールドワークは、当初八重山列島の有人島である 10 島を周る予定であったが、沖縄本島、石垣島、西表島の古墓を巡見したところ、八重山列島に限らず、より近年まで風葬を行っていた島を周るべきと判断。3 年目より、鹿児島県与論島、与那国島、粟国島へと対象を移した。そして上記 2 つの方法論の往還によって、南西諸島に何故、如何に風葬・洗骨といった葬送儀礼が広まったのか、その社会的・文化的・歴史的コンテクストを立体的に考察した。

４．研究成果

（１）「殯」に関して

研究の過程で、近世琉球王朝では風葬（シルヒラシ）を行う前に、4～14 日程遺体を寝廟殿というところに安置していたことが分かった。この遺体を一定期間安置する習俗を、本研究では鉤括弧付きで「殯」と称した。琉球葬墓制研究において、「殯」がシルヒラシとは別に設けられていた事実は等閑視されており、本土出身の研究者間では「殯」は風葬と混同され、沖縄の風葬を日本古代のモガリの残存形態と見る主張までなされていた。この研究状況を指摘しつつ、琉球王朝の「殯」に今一度焦点を絞り、その歴史と成立経緯を明らかにする研究を行った。また、寝廟殿創建（1753 年）以前から「殯」は行われていたことが明らかなため、寝廟殿創建以前はどこに遺体を安置していたのかについても追究した。

結論として、寝廟殿創建以前の「殯」の場所は不明である。また、その成立経緯として、①儒教化、②御後絵（国王の肖像画）の制作、③洗骨の確立、④薩摩の弔問、⑤他界観の変容、という 5 つの視角から検討を行ったが、①～④の視角では、「殯」の成立経緯を十分に説明することは出来ないことが確認された。⑤に関しては、反証の困難さもあろうが致命的な難点は見出されなかった。ただ、庶民における他界観や風葬習俗との関係の中で論じるまでには至らず、課題も多い。

（２）琉球葬墓制の研究史の整理

南西諸島の葬墓制研究は、1920 年代に民俗学分野で開花して以降、近年では考古学や歴史学が中心となり、各分野において豊富な研究が蓄積されてきた。しかし、民俗学の側では十分にこれらの研究を活かせていない状況が続いている。そこで、本研究において筆者の知り得た考古学分野も含んだ琉球葬墓制研究史の整理を行い、公表した。民俗学・考古学・歴史学を含む各分野横断的な研究動向の記述の試みは、『シンポジウム 南島の墓－沖縄の葬制・墓制－』（沖縄出版、1989 年）、或いは『琉球弧の葬墓制－風とサンゴの弔い－』（沖縄県博物館・美術館、2015 年）以来だったと言える。

（３）風葬・洗骨文化の記録保存

風葬が定着する社会基盤や背景にある死生観を解明することを主な目的に、数回にわたりフィールドワークを実施した。実施した主なフィールドワークは以下のとおり。

① 2020 年 10 月　　石垣島、沖縄本島那覇市、中城村、平安座島
② 2022 年 4～5 月　　沖縄本島那覇市、大宜味村、今帰仁村、宜野座村、うるま市、糸満市、石垣島、西表島

③　2022 年 9 月　　沖縄本島那覇市
④　2023 年 12 月　　沖縄本島糸満市
⑤　2024 年 1 月　　沖縄本島名護市、南城市
⑥　2024 年 2 月　　与論島
⑦　2024 年 3 月　　与那国島

フィールドワークでは主に、古墓～現代墓の巡見、洗骨儀礼の参与観察、風葬・洗骨儀礼実践者への半構造化インタビューを行った。その結果、近現代の急激な葬墓制変容の背景には、人口動態の変化や過疎化による火葬化と外部化（葬儀の産業化）の潮流、衛生観念の進展、街づくりの一環としての墓地行政の為す役割が甚大であり、儀礼の規定にあたり“死生観”の及ぼす影響はむしろ限定的であることが看取された。或いは、死生観の変容よりも儀礼の変容が先立ち、死生観とは儀礼の再解釈によって後から付いてくるものであるのかも知れない。よって、本研究の目的である「風葬が定着する社会基盤の考察」にあたっては、今後は近代化政策等にも目配せをした社会学的分析を行うことが重要となると思われる。

なお、本研究は急速に風化する風葬文化を後世に残すため、記録保存を行うという目的も有していた。そのため、上記フィールドワークをとおし、関係各所より記録映像を入手するとともに、参与観察・インタビューをとおして積極的に一次資料を得ることに注力した。結果として、公開方法について課題は残るものの一定数の保存記録を得ることができた。

（４）まとめと今後の展望

研究過程で近世琉球王朝の「殯」の期間を発見し、「殯」についての基礎的研究データを示せた学術的意義は大きかったのではないかと思われる。また、歴史学的・機能的分析だけでなく、“歴史認識の変化”による死生観からの構造的分析を試みたことで、世界観研究にも若干踏み込んだ成果を残すことができた。琉球葬墓制の分野横断的な研究史の整理を発表できたことと併せ、細分化・縦割化が進んでいた同研究分野に学際的視点を投げかける一助となったと考える。

フィールドワークをとおして得た一定の一次資料群を如何に保存・公開していくかは今後の課題である。また、フィールドワークをとおし、風葬の定着基盤や歴史の解明において重要なものは、死生観等の世界観研究ではなく、社会変容と消費文化の浸透という観点を踏まえた“社会学的分析”であることを実感した。葬墓制変容を引き起こすファクターとして、火葬化、外部化の議論はこれまで為されてはきたが、衛生観念や街づくりの一環としての“墓地行政”という視点は琉球葬墓制研究において欠落していたように思われる。今後は、行政や法律の視点も踏まえ、琉球葬墓制を検討していきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 牛窪彩絢	４．巻 25
２．論文標題 「琉球王朝における「殯」再考」	５．発行年 2023年
３．雑誌名 首里城研究	６．最初と最後の頁 4-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 牛窪 彩絢	４．巻 40
２．論文標題 琉球葬墓制の研究史	５．発行年 2023年
３．雑誌名 東京大学宗教学年報	６．最初と最後の頁 116～134
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/0002007936	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 牛窪彩絢	４．巻 24
２．論文標題 琉球における「殯」の基礎的考察	５．発行年 2022年
３．雑誌名 東洋文化研究	６．最初と最後の頁 35-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 牛窪彩絢	４．巻 26
２．論文標題 琉球王朝における「殯」の成立起源	５．発行年 2024年
３．雑誌名 首里城研究	６．最初と最後の頁 55-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　2件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 牛窪彩絢
2．発表標題 琉球の葬墓制における儒教化の諸相
3．学会等名 日本宗教学会第81回学術大会
4．発表年 2022年

1．発表者名 牛窪彩絢
2．発表標題 玉陵の「殯」‐琉球における「殯」の基礎的考察‐
3．学会等名 第161回首里城研究会（招待講演）
4．発表年 2022年

1．発表者名 牛窪彩絢
2．発表標題 琉球における「殯」の諸相
3．学会等名 日本宗教学会第80回学術大会
4．発表年 2021年

1．発表者名 牛窪彩絢
2．発表標題 沖縄における「殯葬」の展開に関する一考察
3．学会等名 日本民俗学会第72回年会
4．発表年 2020年

１．発表者名 牛窪彩絢
２．発表標題 琉球王朝における「殯」の成立起源
３．学会等名 沖縄民俗学会2023年度10月例会（招待講演）
４．発表年 2023年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関